

## 2011年 9月25日・生活と健康を守る新聞「みんなの本だな」欄では

さながら現代詩選集のよう

詩は自分に向って書く

青森県十和田市 斗沢<sup>とざわ</sup>テルオ (57)

1996年冬、私のはじめて「赤旗」文芸欄への投稿詩を入選にしてくれた選者が、現在「守る新聞」詩選者のくにさだきみさんだった。どんな人だろうと、詩集『ミッドウエーのラブホテル』（壺井繁治賞受賞）を買い求め読んでみた。私にとっては難解<sup>なんかい</sup>だった。

後年、詩人会議「夏の詩の学校」でお会いした。私は一丁前に力んで「詩でもってたくさんの人の力になりた」と話すと、「誰かのために書くというのはだめよ。自分に向かって書きなさい」と真っ直ぐ私の目を見て話された。そのとき、懸命に反論したような記憶がある。

内面に引き寄せ

他者に響いた時

あれから十数年、私は今、自分をみつめ自分に問いかけながら詩を書くことを心がけている。震災のことも生活保護のことも、自分の内面に引き寄せ見つめながら書いた詩が他者に響いたとき、自分の詩が輝く瞬間だと。あのときの私の心のどまん中を射止めた言葉に、いつも立ち返ることを心がけるようになった。

くにさださんの最新詩論集『しなやかな抵抗の詩想』は詩人論、芸術論で構成されていて、教養のない私にとってはやはり難<sup>むずか</sup>しい。ただ評論はわからなくても、たくさんの詩人たちの作品が、全編掲載されるように構成されていて、さながら現代詩選集となっている。そこだけ拾って読んでも面白い。

痛恨事、と正面

から向き合う

またエッセイの章の「自殺の背景」は、「血肉にくいこむ痛恨<sup>つうこんじ</sup>事」と正面から向き合った<sup>すご</sup>凄みのある一文だ。長男テツヤさんが2005年に自殺をされたのだ。なぜ？、その背景を推理小説かのように解きあかしていくなかで、現代日本の追い詰められていく人々の背景も浮かび上がってくる。「何故テツヤは死を選んだのか」「どうして死を選ばなければならなかったか」。この何故？ どうして？ がいつまでも自死家族を苦しめる。

私の住む人口6万の街・十和田市も自殺率は高く、昨年度だけでもはっきり自殺<sup>かんてい</sup>鑑定された人は35人。私は今年も市の自殺防止委員になった。

くにさださんの「何故？」の解明にどう関われるか、もう一度「自殺の背景」を読み返してみようと思う。

と紹介されています。